

平仮名は甘くない



山梨大学教授

宮澤 みやざわ

正明 ただあき

平仮名の学習指導要領は大別すると 概形 筆順 筆使
い 字形で、前回は 概形 筆順にスポットを当てました。
今回は 筆使い 字形について考えてみます。
なお、画数が少ない平仮名の筆使いは、字形に直接反映す
るので、「く」などは、を区別しないで扱います。

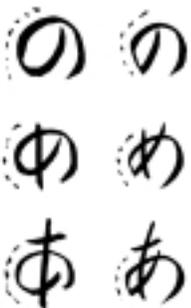
平仮名の筆使いと字形

平仮名の筆使いは、以前触れたように、草書の筆使いから
生じているので、楷書の点画の筆使いに比べて曲線が多く複雑
です。特に、送筆と終筆の方向が多様であること、終筆の止
め、はねが曖昧であることから平仮名の筆使いは漢字より難
しいと考えられます。

その原因の一つとして、漢字が学年別漢字配当表に於て
標準となる字体、筆使い、字形が示されているのに対して、平
仮名は標準が示されていないことが考えられます。「このこと」
による弊害は以前から指摘をしていますが、平仮名の成立事情
から、筆使いは楷書のように規定することは困難であるとの
判断があるようです。これは、このものの、教科書体活字では楷

大回り【の】あ・ぬ・め

右回転の曲がりには属するものですが、一回転しているので大
回り」として分類させてみました。左下の方向転換部は、毛筆
では筆を返す部分なので、静止するところですが、かつて流行し
た丸文字の大回りは、完全な円運動で書かれていました。硬
筆でも「1」(イチ)、「2」(ニ)、「3」(サン)の左図(の)リズ
ムで回転するよう促すと節度のある大回りになるでしょう。



折れ

(浅い折れ) ア【み】の仲間【え・そ・み・る・れ・ろ・わ

ト【ち】の仲間【ち・ら

ナ【ろ】の仲間【そ・る・ろ・を

ハ【ん】の仲間【え・れ・ん

ク【く】の仲間【く

(深い折れ) イ【て】の仲間【そ・て・ひ

フ【ん】の仲間【え・ね・れ・わ・ん

フ【ゆ】の仲間【ゆ



書に調和する筆使い様にデザインされ、ほぼ統一された字形
を得ています。

「く」では漢字にはあまり見られない平仮名独特の送筆部
の筆使いと字形を取り上げ、分類してみましょう。

曲がり

(右回転) つ【し】の仲間【う・か・ね・を

つ【じ】の仲間【ち・つ・ら・ら・わ

つ【ぶ】の仲間【ぶ・や・ゆ

(左回転) じ【え】の仲間【え・せ

じ【じ】の仲間【じ・む・も・れ・ん

じ【じ】の仲間【じ・を

筆使いの曲がりは左右の回転方向で分けられますが、さら
に細かく分類すると右のようにな仲間に分けることができます。
漢字の曲がりは「せ」の三画目に該当するものだけです。これ
だけでも、平仮名の多様性がつかがわれます。

平仮名の折れは、漢字と同じ折れ(浅い折れ)のほかに、平
仮名独自の深い折れ、折り返し」とも言えます(も見られま
す。小学生は深い折れが苦手のように、まるでもとの線に重
なって書いてはいけないかと思っているかのようです。特に「ひ
の字形は、最初の折れが浅いと字形が整いません。て」の折れ
と関連づける理解しやすいでしょう。ひそひそ「ひそり」ひ
そひそはなし「ねえねえおしえて、おねえさん」などの繰り返
返し言葉を用いると楽しく学習できそうです。

結び

よ【は】の仲間【な・ぬ・ね・は・ほ・ま・や

よ【す】の仲間【お・す・み・む



結びの【は】の仲間【は、毛筆では筆を返して結びの「
1」(イチ)、「2」(ニ)、「3」(サン)とリズムをつけて小判
形に書きたいものです。【す】の仲間【は大回りの筆使いと
基本的には変わりません。かつての丸文字の結びは円形で大
回りのように大きく書かれ、誤読されやすいものでした。な
お、「なまはな」は字源から三角形に結ぶこともあり
ます。行書に調和させる場合は、字源に即した本来の筆使い
と形で書かれます。

結びの筆使いは、平仮名のシンボリック存在です。低学年の
うちにその筆使いと形を理解すると、高学年になって、平仮
名の乱れは少なくなるでしょう。